

## 書評

茨木 保 著

## まんが 医学の歴史

順天堂大学医学部解剖学教授

坂 井 建 雄

医学史を飾る先人たちの著作を手に取り、その事蹟を詳しく知ると、それぞれの時代の中で医学を築き上げてきた英智と努力に心洗われる思いがする。古代ギリシャのヒポクラテスは、さすがに紀元前400年頃というだけあって、解剖や病気についての理解は表面的なものにとどまるが、「誓い」の中に記された医師としての倫理には現代にも通じるものがある。ローマ帝国の2世紀に博学を誇ったガレノスの著作には鋭い論理の切れ味があり、解剖学の優れた観察をもとに古代の医学理論を集大成した業績は、あらゆる意味で西洋医学の原点である。16世紀のヴェサリウスが著した『ファブリカ』の解剖図の圧倒的な迫力と人を魅了する芸術性は、人体の観察をもとに近代医学を再出発させた原動力であった。17世紀のハーヴィーによる血液循環論、18世紀のブルハーフェによる医学教育の革新が果たした役割については言うまでもない。19世紀以後には、臨床医学、実験室医学、さらに細菌学と医療技術に携わる数多くの医学者の手により、今日の高度な医学が生み出されたのである。リスターによる無菌手術、

コッホによる病原菌の発見、レントゲンによるX線の発見、アイントフエンによる心電計の開発、フレミングによる抗生剤の実用化が今日の医療にもたらした恩恵がどれほどのものか。日本の医学者では、『解体新書』の杉田玄白だけでなく、細菌学の北里柴三郎、刺激伝導系を発見した田原淳の名も挙げてしかるべきだろう。それぞれの医学者に、それぞれの物語がある。

医学の歴史については、名著と呼ばれるものがある。小川鼎三『医学の歴史』(1964)、川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』(1977)、Singer & Underwood “A Short History of Medicine”(1962)には酒井シヅラによる日本語訳がある。これらの名著は、高い学識を有する著者が医学の広い範囲にわたって書き上げたもので、教えられるところが多々ある。また解剖学、生化学、病理学、細菌学、外科学、神経学、血液学、麻酔学など、学問領域ごとに優れた歴史が書かれている。とはいえ領域ごとの医学史は初学者には詳しすぎるし、医学史全体を収めたものはやや敷居が高いうえにかなり古びてしまったように見える。医学の歴

史について、医師だけでなく一般の人にもなじみやすい入門書がないものかと、長らく願っていた。

そんなところへ現れたのが、『まんが 医学の歴史』である。これまで歴史上の医学者に親しむ術といえば、後世の伝記の類、若干の肖像画を中心に、少しがんばって本人の残した著作を読むといったあたりにほぼ限られていた。本書では歴史上の医学者たちが、場面の中で生き生きと会話を始め、当人の考えまでが吹き出しの中に読み取れるのだからたまらない。

こんなフットワークの軽い医学史入門書を、一体誰が書いたのかと思えば、文章と絵のへたくそな医者でもなければ、医学を知らない漫画家でもない。著者の茨木保先生は、婦人科のクリニックを開業する現役の医師であり、『ヤング・ジャンプ』などにオリジナルのマンガを描く漫画家でもある。なるほどとうなるしかない。

著者の言にもあるように、歴史を書くにはどうしても主観が入り込む。ヴェサリウスが奇人として描かれていたり、登場人物の善悪がはっきりしすぎていたり、個人的に気に入らないところはいろいろあるのだが、それはあくまでもご愛敬である。この本が医学の歴史の面白さを多くの人に伝えてくれそうなのは、実にすばらしいことである。

〔A5 頁356 定価2,310円  
(本体2,200円+税5%) 医学  
書院刊〕

\* \* \*